

序 大平正芳と私

エドウィン・O・ライシャワー

大平正芳と私は共に一九一〇年、明治四十三年の生まれである。実際には彼の出生は私より七カ月前だが、日本の、とくに当時のならわしでは、生まれ年を一歳として数えたので、それによれば、彼の死んだ年に我々は二人とも七十一歳だった。彼は私より二百十七日しか年上でなかったが、よく戯れに自分のことを「センパイ」、私のことを「コーハイ」と呼んだものである。

しかし、年齢の近いことだけが、私が大平に特別の親近感を覚えた主要な理由ではない。彼は、とっつきは分かりにくい、控え目な男に見えたが、次第に私は彼に深い友情と尊敬と信頼を抱くようになった。実際、彼こそ日本の未来のリーダーだと考えはじめたのである。

大平は、引っ込み思案であるように見えることによって目だつ人物であり、人の後に追隨するように見えることによって人を指導する人物であった。これは彼が、未来についてのビジョンを持っていたからである。当時、たいていの日本人は混乱して、どう生きるべきかの指針を狂おしく探し求めていたが、彼は、前進する前には十分な理解が不可欠だ、ということを知っていた。また彼は、日本人がまず追隨する気になるべきだということを理解していたので、他人をつき動かすようなことはしなかった。しかし、彼のビジョンは、世界のすべての国の地球的な秩序が必要となるはるか未来にまで広がっていた。彼は、まだ日本がそいつ

時代を迎えるだけの用意ができていないことを知っていたので、他人を怒りに誘うようなことはせずに、そつと進みながら時の来るのを待ったのである。

大平は、偉大な才能を持つ天性の政治家だった。その気になれば、生涯を通じて日本をずっと前進させることができたかもしれない。しかし、もしそうしたら、おそらく彼は政治の指導権を掴むチャンスをもつとのろまで凡庸な政治家に譲ることになったであろう。今日、日本は世界の大国の一つとしてずばぬけた工業力と金融力を發揮しているが、彼が政界の指導者になったときには日本はまだそれほど強力ではなく、他の先進工業国や、アジアの多くの諸国や、またとくに日本の近隣諸国の側には、日本に対する強い怒りが残っていた。大平は、自分の目標を達成するには時間がかかるということを知っていたが、彼が世界の平和的秩序の創造に強力な日本が指導的な役割を果たすときのプランを抱いていたことは明らかである。彼はたぶん、日本と世界にとって唯一の開かれた道が、世界貿易と普遍的な正義であるということを理解していたのである。彼はインソップの亀のようにゆっくりと動き、時にはまったく動かないように見えたが、彼は明確な目的と確固たる規範を持っていた。私の目には、彼はその控え目な生き方をすらぬく巨人のように映ったのである。

大平は、非常なエネルギーを持つ卓越した人物でありながら、賢明にもこれらの資質を覆いかくしていた。それらの資質に加うるに、すぐれた財政運営能力や長期を見通す構想力があつたから、いずれにせよ彼は政界で重きをなすことになったであろう。しかし、真に彼を傑出した人物としたのは、彼がよりよき世界をつくるための透徹したビジョンと深く秘められた規範を持っていたからである。

私はしばしば、「ポリティシャン」と「ステーツマン」という二つの言葉には、日本語でも明らかな区別があつた方がよいと考えたことがある。いずれも一般に「政治家」と訳されているが、この二つの言葉には天と地ほどのへだたりがあり、ステーツマンには、その人物の生活を律する規範というはっきりした意味がこ

められている。むろんステーツマンは、ポリティシヤンのように巧みに人を繰る手腕と資質を持つが、同時に、それ以上のもの、すなわち一連の明確な指標とそれによって生きる力とを持つのである。

かつて大平は私に、自分はクリスチャンだと言ったことがある。後に私は、彼が青年時代に街頭福音伝道者として働き、その後、一步進んで矢内原忠雄のもとで無教会主義の研究を深めたということを知った。大平に、たんなるポリティシヤンではなく、ステーツマンとなる人格と規範を与えたのは、このキリスト教的背景だったのではなからうか。彼は、私とその信仰上の考え方について論じたことはなかったし、また、その日常の政治活動や世界の未来についてのビジョンを貫く政治原則について説明してくれたこともなかった。私はただ、彼と交わした会話の断片から、彼の心にあるものや彼を動かしていたものについてある種のヒントを得ただけである。彼の態度の全体や多くのこまごました行為から、有能なポリティシヤンという像ではなく、完璧なステーツマンという像が浮かび上がってきたのである。彼を知れば知るほど、私は、彼が世界の指導者となりうる人物であると確信するようになった。

大平と私は、生まれた時期と同じく、生まれた場所もそう離れてはいなかった。彼の生地は、瀬戸内海の東端に近い村であるが、それは、この内海を囲む三つの島のうち最も小さい四国にあった。彼の村は、私が生まれた東京から西へわずか六百キロメートルのところにあった。その間の距離は、すでに山裾に沿って鉄道が走り、その水域を汽船が航行していた日本では、そう大きなものではなかったが、ボストンからフィラデルフィアへ、シカゴからセントルイスへというほど簡単な行程でもなかった。事実、それはある意味でたいへんな距離で、大きな文化の差とおそらくは百年ほどの時間の差を意味したであろう。日本は、欧米に追いついて肩を並べるには、まだ多大の努力が必要であったし、大平の生まれた香川県は、依然として古い封建時代の多くのしきたりにとらわれていた。一九一〇年の香川県 東京間は、未だに長い長い道のりだったのである。

アメリカの一少年と同時代の日本の少年たちの中の文化的ギャップはもつと大きかった。その頃、日本に住む欧米人はきわめて少なく、私は、少年正芳がその十代後半までに、果たして、当時のいわゆる「西洋人」を目にしたことがあっただろうかと思う。むろん私の方は、身のまわりにたくさん日本人の少年たちがいたが、私は、彼らとの交わりを深めなかった。彼らは私に向かって、嘲るように「グドバイ」と呼びかけたり、イジン・パツパ、ネコ・パツパという、未だにどう訳してよいやら分からない言葉を投げつけてきたりした。この言葉はたぶん、我々欧米人の多彩な目の色や不可解な言語を意味したものだっただろう。

日本の少年たちは、バットの真芯に当たると、おそろしく遠くに飛んでいく小さな硬いゴムボールで野球をやっていた。私はそれに入れてもらいたくて、彼らがゲームをしているまわりをうろろしたが、一度も仲間に入れとは言われなかった。日本の少年たちには、明らかに余所ものである私などお呼びではなかったのである。

私の少年の頃には、まだラディヤード・キプリングの時代の雰囲気の後を引いていた。と言っても、それは私が「東は東、西は西」というキプリングの精神を受け入れていたということではない。私の両親は伝道教育者として新しい学校の創設を手伝っていたが、これらの学校の職制上の上司である日本人に部下として仕えることに疑問を感じていなかったし、知り合うことになったキリスト教の指導者を心から尊敬してもいた。日本仏教の研究で少しは知られていた父は、この宗教についての十分な知識もなしに、こうした複雑で知的な宗教を論じようとするのがいかにばかげているかを指摘したが、欧米人の同僚のうちには、これに腹を立てるものもいた。両親は、当時のアジアで多くのイギリス人が持っていた支配者根性をまったく持たず、あらゆる種類の日本の役人に完全な敬意を払っていた。この国はいずれにせよ日本人の国であり、彼らがよいと考えるように統治する権利がある、というのが両親の見解だった。我が家にはたいいてい二人か三人の召使いがいたが、我々はその全員を家族同様に待遇した。彼らは我が家の夕べの祈りに参加し、我々子どもた

ちを育てる上で大きな役割を果たした。

私は生まれながらに、こういう態度を身につけたので、成長するにつれて、日本の経済力や軍事力、そして日本の近代化の速度に誇りを抱くようになった。東京に住む少数の我々欧米人の子どもたちは、この都市を一大帝国の首都として誇らしく感じ、横浜や神戸からきた高慢ちきな欧米人を軽蔑した。これらの都市では十九世紀の鼻もちならぬ空気がまだ残っていたのである。我々は、欧米人の多くが示す軽蔑に対して抱く日本人の怒りが分かった。軍事的舞台への登場が遅れたため、日本が比較的小さな帝国しか与えられないのは不公平だと感じる日本人の気持ちを理解することもできた。ロシア、ドイツ、フランスは、日本に対して、この国が一八九五年の中国との戦争の結果、やっとの思いで手に入れた領土の大部分を吐き出さざるべきだと主張したが、我々はこうした人種差別的な攻撃について日本人自身と同じほど憤慨した。この三つのヨーロッパの国が、日本人がやむなく手放したものを呑み込んだときには、我々の怒りはいつそう高まった。アメリカ、カナダ、オーストラリアが一九一九年のベルサイユ講和会議で人種的平等に関して提起された条項を傲慢にも否決したことは、多くの日本人にとつてと同じく我々にとつても、平等に扱われるべき国に対する不必要な侮辱のように思われた。この裁定は「東洋」移民に対して障壁を設けるもう一つ的手段に過ぎず、思いやりなどまったくなくしにつくられたものであることが明らかだった。

四二(ポーン・イン・ジャパン)として知られた我々若者は、明らかにアジアのナショナルリストと同じ心境だった。我々の態度は日本に対してだけのものではなかったが、我々は、ほとんどの日本人と同じく、日本帝国主義が朝鮮や台湾でやっていたことを知らなかったのである。我々は、アジアの他の大部分を併呑したヨーロッパの帝国と、多くの欧米人がアジア人に対して示した傲慢さやいやらしい優越感を厳しく非難した。しかし、他の多くの国が帝国の建設を諦めた一九二〇年代、日本が帝国主義に立ち返るに及んで、私は日本の外交政策に対する態度を変えはじめ、世界平和に対する日本帝国主義の脅威を理解するにいたった。

むろん私には、日本人の友人が一人もいなかったわけではない。私は、気楽につき合えるだけ上手に日本語を話すことができたし、父の教え子の学生の中には、英語に習熟したいという願いから、年齢の差にもかかわらず、我々子どもたちと友達になろうとするものもいた。それまで海外で育てられた経験のある少数の子どもたちは、我々の小さな日本アメリカン・スクールに通い、人種のるつぼというアメリカ的精神の中で、我々グループに完全に融け込んだ。華族出身者の中には、ときどき何らかの理由で、我々と交流しようとするものもいたが、私には、一九二七年に高校を卒業し、アメリカのカレッジに行くまで、ほとんど日本人の友人が出来なかった。以後八年間、私は日本人との接触がなかった。もっともその間のアメリカとヨーロッパにおける研究で、私の歴史一般についての関心は、古代の中国と日本にしばらくはらわれていたのであるが。

私に、同年の正芳のような少年と深いつきあいがなかったのは、まことに残念なことだ。もしあれば、私は彼から、そして彼は私から、たくさんのお話を学ぶことができたであろう。そこには、彼と私が共に育ち、共に仕事につくことになる世界があったが、それは別の惑星の上にあるようなものだった。文化的、人種的ちがいが、我々を大きく遠ざけていた。社会的障壁はおそらくもっと大きかったであろう。私の父はまっとうな学究的教育者であり、正芳の父は遠く離れた村に住む中流の農民だった。この頃以後、階級の境界はアメリカで驚くほど弱まった。日本ではもっと弱化した。一九三〇年代には相当に衰えていたが、まだ一九一〇年という段階の、そしてとくに完全な封建制度から抜けだして四十年しかたっていない日本においては、それはなおきわめて強かったのである。

正芳と私の歩む道が交差するということなど、戦場で遭遇する場合を除いては考えられもしなかった。我々は巨大な変化の世紀にさしかかっていたが、これに自らを適応させていくのは自分自身の取り組みべき課題であった。正芳は、きちんとした教育を受けようという野心を膨らませて、日本の教育と官僚制度の正規のステップを踏み、ついで政治的影響力のあるポストをめざして、より高い官僚への険しい坂道をのぼっ

た。私は、他の中流階級の少年と同じくカレッジを卒業し、大学の教授という椅子につながる学究的関心を育てた。

振り返って、我々の青年時代に階級的硬直性が存在せず、日本人と欧米人の交流が容易であったとするなら、大平も私も、二人が信ずるにいたった世界的理想のために邁進することが、どれほど容易だったことだろう。まずありえないことではあるが、もし我々が友人になったのが子どもの時からであって、五十一歳という中年になってからではなかったとしたら、それはどんなに素晴らしいことだったろうか。

大平の幼少時代は、大正デモクラシーとして知られる時代の最盛期にあたっているが、日本のデモクラシーは、実際には、数十年にわたって育成された。古い封建制度が公式に終わりを告げてから間もなく、責任ある政治にもっと広く参加させよという強い要求が、日本の津々浦々から起こった。封建制度の崩壊は一八六八年であったが、すでに一八七〇年代初期には政党が形成されつつあり、政治に参加させよという要求は、都市の商人や農民の間でふつうのこととなっていたのである。

一八九〇年には、それまで権威主義的な態度をつづけてきた新政府が、国民にある種の政治権力と市民権を与えることを余儀なくされた。しかし、政府が驚いたのは、国民がそれ以上を要求し、一八九〇年発効の憲法に認められたある種の条項を振りまわして、予想の限度をはるかに超えた政治的影響力行使するようになったことであった。選挙で選ばれた政治家がお手盛りで役につく政府当局者と権力を分有しはじめ、一九一三年には、日本の内閣が選挙された議会の参加と支持なしには有効に統治できないことが明らかとなっていた。この年はしばしば大正デモクラシーの始まりの年とされているが、その背景には、四十年にわたる自発的な民主主義の発展があったのである。

一九一三年からしばらくの間は正芳と私にとって最大の間形成期であり、それはまた日本にとって並外れた開放と自由の時代であった。一九一八年、主として政党政治家から成る最初の内閣が権力の座についた。

ドイツおよびオーストリア・ハンガリー帝国に対するイギリス、フランス、アメリカという三大民主主義国の勝利と、最も後進的な独裁国であったロシアの壊滅とは、時代のはつきりした徴候であった。日本の未来は帝国主義的侵略にあるのではなく、自由貿易と国際協調、とくにアメリカとイギリスとの間のそれにあるように見えた。

社会的、知的潮流の多くはきわめてリベラルだった。大都市だけでなく日本全土に、知的、社会的自由の新風が吹きまくり、正芳が住んでいたような辺鄙な地域にも達するように感じられた。同じようなことがアメリカにも起こっていたが、長く孤立して封建時代をつづけてきた日本に吹きわたる風ほどの勢いではなかった。大平の後年の人となりの特長となった民主主義的精神と開かれたグローバルイズムが、彼の学生生活に生気を吹き込んだ大正デモクラシーの時代からその気風と活力を得たものであることは疑いない。

大平は、生まれた村から都市へと教育の階段を登るにつれて、深い宗教的経験を味わった。このようなエピソードはきわめて個人的かつ特殊なものであつて、他人が容易に理解したり説明したりすることはできない。彼は、彼がこの特殊な経験から、その後の人生を左右する多くのことを体得したことを疑われない。彼はほぼ丸一年間、キリスト教の巡回説教師の影響下にあり、街頭に立つて宗教パンフレットを渡す夕べを過ごした。彼の教師は明らかにカリスマ的な人物で、その若い弟子に強い印象を残した。しばらくの間、大平の全生活はこの新しい関心の対象に捧げられたように見える。私は、彼があるとき、自分は英語を教えて生活していたことがあると話してくれたことを思い出す。その頃大平は、我々の会話でほとんど英語をしゃべらなかつたので、彼はこれを冗談として言つたのだが、福音伝道者としての仕事を果たすべく、そのさやかな英語の知識をもとに、教師をやつて収入を得ようとしたことは、彼の信仰への努力に捧げた強靱な精神をよく表すものと言える。

後年の大平は、自分の信仰上の経験をほとんど語らなかつた。彼が、内村鑑三の創始した無教会主義を継

く矢内原教授の弟子になったとき、その信仰上の経験が新しい性格を帯びたことは疑いない。この運動は、開かれた福音主義やカリスマ的な魅力に捧げられたものではなく、感情よりも理念や理想の力によって導かれる人々に向けられていた。つまり、それは、大平がなったような、知的かつ政治的な指導者のためのものだったのである。

おそらく大平の信仰体験は、彼が指導者となる上で必要だったのであろう。それは彼が、日本を超えて存在する世界という概念、人間としての連帯の認識、世界的な法と秩序の意識を得るのに役立ったかもしれない。それらは、もし人類が存続していくならばどうしても実現しなければならぬ「一つの世界」の基本的な要素だったのである。

大平は大正デモクラシーの真の申し子であった。彼自身そうした人間として、日本でいかに官僚が強力で尊敬されていたようにも、たんにすぐれた官僚にではなく、「ステーツマン」になる道を進んだ。ステーツマンとは、当面のニーズを超えた視野を持ち、この国を、もはや身に合わなくなつた孤立した過去から、今日の日本が存続しうる唯一の環境すなわち国際的な交流と貿易という広野へと導く峠を越えさせる人物のことなのである。

大平は、日本の経済専門の指導的国立機関の一つである東京商科大学（現一橋大学）を卒業したが、この頃には大正デモクラシーの精神は衰微し、一八九〇年の憲法の曖昧さに付け込んだ軍部が実質的にこの国の支配権を握っていた。大正デモクラシーの政策は世界貿易、並びにアメリカおよびイギリスとの緊密な協力ということであったが、陸軍は、正反対に、中国で新たな侵略を始め、日本をこの米英両国との対決に引きこんだ。自国でその産業も兵器も動かすに足る石油を産しない日本は、強大国との戦争が譲歩か以外に出口のない墓穴を掘っていた。それは日本軍部としても最も望まぬところであった。

こういふことのすべてに大平がどのような態度を取っていたかについては、記録は黙して語ってくれない。

彼はきつと、私や多くの若者たちと同じように考えていたのである。我々は、困惑しつつ事態を注視していたが、職についたばかりでもあるため、自分が個人的にそれを何とかできるといふような考えは起こさなかつた。私は自分の学究生活をつづけた。それを離れたのは、アメリカ陸軍からほとんど強制的に日本軍の無線暗号の解読と翻訳の手伝いを命じられたときのことである。

戦争が始まったとき、私にとつて選択は全く単純だつた。私は、日本が中国はじめさまの国の征服を企図し、アメリカに「卑劣な」奇襲攻撃を仕掛けたのは間違つてゐることに疑いを抱かなかつた。大平の思ひはおそらく、民主主義や世界連帯への信念と自らの自然な愛国心の狭間にあつて、私よりもつと混乱してゐたであらう。彼は、大学を卒業するにあたり、政府の最も重要な文官官庁の一つである大蔵省にはいり、社会的に地位の高い、数少ない初ポストを得た。彼が就いた最初の重要な職務は、日本陸軍が内蒙古といふ名のもとに掠取した中国北部の広大な地域における文官の代表であつた。

大平がつづく数年間、どうやって官僚組織の上部への地位につながる階段を登つていったかについては、本書に詳しく記録されている。彼の地位が重要であつたのは、とくに戦後初期の数年間の復興の時代に、大蔵省の決定が政府全体の運営にとつて決定的な意味を持つてゐたからである。

戦後の大変革のこの時期に、大平は、強力で威信の高い官僚から、より不確かな政治の道へと転換する重大な決意をした。一九四七年の新憲法によつて、国会は「国権の最高機関」となり、「唯一の立法機関」であるといふことになつた。このことは、国会が、官僚はもちろん象徴天皇をも支配するといふことだつた。軍隊は独立した戦力としては放棄されていたが、言うまでもなくこれも国会の支配下にあつた。日本はすでに事実上、イギリスの議会制度の基本を採用してゐた。軍部が対外政策を牛耳り、ついで一九二〇年代後半から一九三〇年代にかけて政府全体を握る以前の大正デモクラシーの時代にはすでにその方向へ進んでゐたのである。

権力が国会に移ったことを受けて、若干の野心的な人々は官界を離れ、指導権を手に入れる究極的な道である政界に移った。元外務大臣の吉田茂が先鞭をつけ、一九四五年十月から一九五四年十二月までの九年のうち六年間、首相の座にあった。さらに、一九五七年二月から一九七二年七月までの十五年半の間、同じポストを占めた三人もすべて戦前の官僚だった。このうち一九六〇年から一九六四年まで首相であった池田勇人は、最も大平によく似ており、彼に最大の影響を与えたことは疑いないように見える。池田は、大蔵省で大平の先輩であった。ここで池田は、若い大平を可愛いがり、彼の判断を信頼するようになった。私には池田は、大平が後に発揮したのと同じ巧みで確固とした指導力を示したように思われる。彼は、大平に匹敵する長期の政治ビジョンと揺るぎない楽天主義を持っていた。一九七二年以後、政権は次第に、官僚経験のない党人派政治家の手に握られ、大平のような人物は、むしろ例外になった。

吉田、池田をはじめ戦後の首相は非常に親米的であり、なかでも、大平が群を抜いていた。彼らは日本自体が、まだその機が熟していないと感じている軍事的な役割や指導的立場を押し付けられるのではないかぎり、アメリカと完全な協調を保った。日本の国民は、ほとんど熱狂的と言ってよいほど平和主義的となっており、政治的な論争はもちろん、さらに進んで軍事的な紛争に巻き込まれるようなことになる一切の役割を果たすことに不安を感じていた。日本のすべての指導者は、その個人的な見解がどうであろうと、民主的な政治制度によって、日本が戦争に巻き込まれるおそれのないような「低姿勢」の外交政策に縛りつけられていたのである。

日本の政治制度は完全に民主主義的ではあるが、それがモデルとしたイギリスの制度とはまったくちがっており、三権分立と大統領制を備えたアメリカとはそれ以上に似ていない。日本の民主制度がイギリスやアメリカとちがったかたちで運営される主要な理由は、その一風変わった選挙制度にある。

権力の大部分を行使する衆議院は、いわゆる中選挙区制によって選ばれる。この制度では、有権者はただ

一票を投ずるが、選挙区ではその人口に応じてそれぞれ三〜五人の議員が選出される。そのため、多くのヨーロッパの諸国に見られるような比例代表制に近い結果が実現するが、ヨーロッパほど政党の分立を伴うわけではない。選挙区で投票総数の約二〇パーセントを獲得した政党は、ふつうは一議席を保証されるが、これより小さい政党は実質的に排除される。

イギリスやアメリカのような二大政党制は、中選挙区制においてはほとんど確実に失敗する。というのは、どの政党も、他の政党や諸派が連合すれば、過半数をとることがむずかしいからである。諸派のうちのいくつかは、単一のテーマをかかげた候補者か、あるいは地方の名士が当選するだろう。中選挙区制の場合に必要なことは、大政党を支持する有権者が、限られたしかるべき数の候補者にできるだけ平均的に票を分割して、その議席を獲得することである。しかし、この調整は容易ではない。

第二次大戦前の日本には、いずれも一八七〇年代から八十年代にかけての政党創設運動に根ざす二大政党が存在した。これらは、ともにその経済政策において根本的には保守であつたが、軍部や官僚や官廷貴族政治から権力をかち取るうという点では、「リベラル」であつた。それらは、表面的には、イギリスやアメリカのような二大政党制を形成していたが、イギリス議会の政党ほどはイデオロギー的に対立しておらず、混沌としたアメリカの議会よりもずっとよく運営されていた。

戦後初期の頃は、この二つの伝統を引き継いだ政党が政界を支配しつづけたが、一九五五年には、どちらの政党も自党だけでは国会で過半数を制しつづけることができなことが明らかとなつた。これより小さな政党、とりわけ社会党、共産党、民社党、そして、その後に登場した公明党が成長したので、伝統的な政党はどちらも、これらの政党およびもう一方の伝統的な政党に対抗して、過半数を獲得することを期待できなくなつたのである。これら二つの伝統的な政党は、多少なりとも左翼的傾向を持つ新しい反対グループとの間よりも、相互に共通するところがあつたので、この問題の明白な解決は、この二党が力を合わせ自由民主

党（自民党）として合同することだった。「この名称は過去の党の歴史の多くを表している。

日本の政治がイギリスの議会制度と異なっているもう一つの点はその構成にある。イギリスの場合とちがって、日本の国会議員はその郷土の選挙区の出身であるため、基本的には地方有権者に対する個人的な公約と、カリスマと言えば言葉が強すぎるが、個人的魅力に基づく選挙に依存している。それでは、アメリカの議員のように無統制かという点、そうではなく、彼らは厳しい党規律をまもり、国会における投票に際しては、まとまって党の決定に従う。その主要な原因は、おそらく日本社会の至るところで見られる強いグループ行動の傾向があることである。日本人の多くは、グループに属するものとして自らを確認し、またそのように行動する。当選年次の少ない議員は党や国会のよいポストを得るために当選年次の多い議員の力を頼る。一方、指導者は、高いポストにいたり、究極的には総理の座を手に入れたりするための戦いで、その系列議員に依存する。以上のことから分かるのは、日本には、基本的にはアメリカ流に個々の候補者の地方における個人的な力と、その結果としての強い地方的利害とによって選出される議会と、ワシントンよりもロンドンに象徴される、規律を発揮する議会とを組み合わせた国会があるということである。

たいていの日本の政治家は、一人の強力なリーダーの傘下にあつて、選挙活動の援助をしてくれる派閥、もしくは「派」に属している。派閥のリーダーは、政策よりも野心によって分かれ、党の支配権を握るために合従連衡を繰り返す。派閥は政党に望ましい柔軟性を与え、政権と政策の変更を可能にする。人によつては、自由民主党が単一政党ではなく、政党の寄り集まりであり、つねに有権者の過半数を構成しうるような幅広い人材と政策を持っていると言うものもある。これまでのところ、それはたしかにうまくいった。一九五五年以後のすべての首相は自民党に属し、安定過半数を維持するために自民党以外の少数の支持が必要になったことはごく稀だった。

自民党が長期政権によつて大きな力を得、複雑な組織となったことは当然である。実質的に全国的な組織

を持たないアメリカの政党とはちがって、自民党は、真の意思決定機関である役人と委員会から成る精密な組織を持っている。提出される法案は、党と関係省庁の間でややこしい交渉を重ね、大企業、同業者グループ、利害関係グループ、野党など、さまざまなグループとの間の長々しい会議にかげられる。ついで、それはふつう、官僚の手によって起草され、党内の委員会の検討と党の審議というこみいった手順を経てから、最後に国会に受け入れられる。法案がすでにきわめて慎重に検討され、すべての利害関係グループも言うだけのことを言っているので、国会における議決はたいへい活気のない儀式になってしまふ。結果が事前に分かっているからだ。そこには、ワシントンやロンドンで聞かれるような激しい討論も華麗な雄弁もない。しかし、日米英の三つの制度は全然異なっている、日本のやり方は、他の二つと同じくまったく民主的なのである。

派閥のリーダーがトップの座に進むのは、それぞれの派閥の大きさと、他の派閥の指導者が他の候補よりも自分を受け入れてくれるということによる。この状況は、首相を国家の指導者としては弱い立場に置く。それは合意を通じて取決めに達することを求める通常の日本的なやり方の場合と同じである。首相は、たくさんの人々の感情を害しないようにしなければならぬし、他の派閥の指導者の気に入られることも必要である。さらに、自分の派閥のメンバーの支持を得て、これを維持することも大切である。メンバーのために余分の選挙資金を手当てし、彼らを党組織や国会における有力なボストにつけてやることもできなければならぬ。しかも、彼は、自分自身の派閥においてすら、大声を立てることはできないし、何であれ海外で話すことについては、きわめて慎重にする必要がある。欧米の大統領や首相たちが自国のために大胆に語りうる場面で、日本の首相は人目につかないようにしていなければならない。さもなければ、他の政府から誤解されるばかりでなく、日本人自身から非難される危険もある。こうした状況があるために、日本とその最も近い同盟国の間に、多くの困った誤解が生じた。努力しようという約束は、取決めだと理解されがちである

が、それは実は、善意からの約束を果たすことのできない人物による空約束に過ぎないからである。

本書に詳細に述べられた、官僚として、政治家として、首相としての大平の経歴は、日本の政治制度をまざまざと示す。彼は、日本の基本的なパターンを踏襲したが、同時に自らに忠実で、確固とした理想を持ちつづけた。それが、首相の座についたときにも、彼を余人にないような強い立場を取りうる並外れて強力な指導者としたのである。

大平には、他の指導的政治家との密接なつながりがあるという強みがあった。一橋大学の同窓との関係も助けとなったが、もっと重要だったのは大蔵省出身の成功者という経歴があったことである。この役所における経歴は、おそらく官僚の背景としては最上のものであったであろう。

大平は、役所においても、のちに党においても人望があった。彼は、どうしたらおどしたり攻めたりせざるに、支持を得られるかということを知っていた。彼の温厚な人柄は、その手腕や強い意志とあいまって、党の先輩にも後輩にも愛された。彼が池田の後をついで派閥のリーダーになり、さらにその派閥で池田の次の首相になったことも驚くには当たらない。

私はいつも、大平が完全な平常心を保っていることに強い印象を受けた。日本人はみな、他人からの、とりわけ外国人からの批判を気にして、他国民よりも落ち着きがないのがふつうであるが、大平はこういう気配は少しも示さず、つねにゆったりとしていた。彼は、人目を引く風采ではなく、ずんぐりむっくりしている上、いくらからだらしいようにみえることもあったが、そのことを気にしなかった。彼の前に出た人がくつろいだ気持ちになれたのは、たぶんそのためである。私は、彼が東京からワシントンへの肉体をすり減らすような旅のあと、ソファに身を伸ばして重要な会議の始まるのを待っている間に暫時うとうとしているのを目にしたことを覚えている。当惑した彼の同僚がすぐに彼を揺り起こしたが、彼は自分のふるまいが不作法に見えるかもしれないということなど、まったく気にしていないように見えた。この出来事は、彼のい

つもの、ねむそつな、のつそりした風貌にびつたりだった。多くの日本人は、彼の外見にうんざりするよりも、あまり魅力的だとは考えないにせよ、ユーモラスだと思ったのである。それは、ある種の逆カリスマだと言えよう。

私が初めて大平と会ったのは、彼が池田内閣の官房長官をつとめていた一九六一年の春のことである。当時私は、そのポストがいかに重要か分からなかったし、大平は、どちらかと言えば目立たない、内気な人物に見えた。池田が彼を外務大臣にしてから、ようやく私は彼をよく知るようになったが、私の印象はまったく変わった。大平はお喋りではなかったが、彼の言うことは道理にかなっていた。彼はつねに直截で、信頼できた。私は、彼が話してくれることを完全に信じてよいということが分かり、彼に全幅の信頼を置くようになった。これは、彼が国民に語ったり、私に個人的に話したりしたすべてのことに当てはまる。この点を明らかにするために、一つの出来事を語るのがよいだろう。

アメリカ力は、核兵器の存在が云々された場合、問い合わせに答えて、つねにその確認も否認もしないと声明してきた。戦略上の理由から、それは必要な防衛措置であった。日本の国民は、当然ながら核兵器に対して敏感であり、このような兵器を「作らず、持たず、持ち込ませず」という非核三原則を主張していた。この原則が採用された当時、「イントロダクション」(持ち込み)という言葉は日本の領海を核兵器が通行することは含まないと考えられていた。それは、日本の防衛を含むアメリカの戦略にとって必要なことだったのである。しかし、不幸なことに、日本の国民は、核武装した艦船の航行が含まれると考えはじめ、ついで野党がこの考えを自民党攻撃に使うようになった。アメリカ大使館が困惑したのは、日本政府がそのポイントを明らかにせず、ただ、アメリカ政府を信頼していると述べて、問題を避けたことだった。これでは、アメリカが核兵器の「イントロダクション」に関する理解に、実際に違反するだろうという印象を残すことになる。

これはそのままにしておけない事態であったため、私は大平にその点について非常に慎重に話した。彼は

きわめて簡潔に答えた。私はこの問題を理解しており、それを解決しようと思つてゐる。だから、あなたは、これについて他のものに話してはならない、と。私は彼が何をしたかは知らないが、この問題に関する国会の議論はただちに止み、何年ものちまで再び生じなかつた。それが起こつたのは、私が大使を辞めてからずつとあと、大使館も日本政府も他の人が責任者となつてからのことである。状況もそれまでに変化しており、大部分の日本人は、アメリカの軍艦が核兵器を積んで日本の領海を通過することが当然だと考えていた。この出来事全体はそれ自体として興味深い、ここにそれを想起するのは、大平が自分の言つたことは完全に守つたということを示すためと、もう一つは、彼が政治の世界でものこをなしとげるときに使つた明らかにな「魔術」を例証するためである。

我々の間に友情が生まれて間もなく、私は、大平がいつか首相になると信ずるようになり、その確信を揺るがせたことはなかつた。彼は、賢明で真摯な信念と、真の国際主義の意識と、万人の認める廉直さと、快い人間関係とがみごとに組合わさつた人物であつた。その行動において、彼は控え目で寡黙だつたが、同時にその目的を達することにきわめて巧みであつた。日本人の目から見、彼の人格は政治家として理想的であり、また外国人にも、彼を知つたものにとつては印象的であつた。その控え目な性格にもかかわらず、彼は多くの面で並外れて有能だつた。私は、かつて彼がすでに政治家としての頂点に達しかけていたとき、何の理由だつたか忘れたが、私のために催されたレセプションに出席してくれた時のことを思い出す。こうした場合のならわしとして、ひと言述べることを求められ、彼はたくまざる態度で短い挨拶をしたが、それは私がこれまであらゆる国語で聞いたどんなスピーチよりも、あたたかい、要領を得た、そしてユーモラスなものだつた。

大平が首相になつてからのことだが、私がたまたま日本に行ったとき、彼を首相官邸に訪ね、実を言つて、これという特別の用件はないが、あなたが座るに値する椅子に座つてゐるのを見る喜びを抑えきれないのだ

と言った。私はむろん、彼が見事な出発をする前に、時ならぬ死が彼をその座から退けてしまうことなど知る由もなかった。

もし大平が死ななかつたらと考えると、私は、日本が大平の死によって受けた損失の大きさに茫然たらざるをえない。それは、多くの日本人が考えているよりもはるかに大きな損失である。その後の十年間に、日本は一大工業国家および潜在的な世界のリーダーとなったものの、いま世界中で、疑惑につきまとわれ、非友好的な態度に脅やかされている。日本は、大平思想の中心にあつた高潔な理念を切実に求めているが、大平に代わりうるような人物はいない。

日本は、自分自身の幸福だけにしか関心のない、まったく自己中心的な国家であるという評判を得てしまつたが、日本の繁栄も、さらには存立も、その継続は国際的な協調と信頼とにかかつているのである。日本人は、共に栄え共に滅びる人類の一部であるが、彼らは世界の人々に、自らを他のすべてとちがつたものと考えているという感情を与えてしまつた。いまこそ人類が同胞であるという大平の理念が絶対に必要な時である。環太平洋構想という彼の理念に見られるような人類のより大きな組織が明らかに必要である。もし生きていけば、彼は現在までに、この理念を全世界を包含するところまで広げたことであろう。グローバルな協調には、与えるものを多く持つ豊かな国が物資と人材で大きな貢献をすることが不可欠であるが、日本人は全体として大平とはちがひ、この点についての知的理解をほとんど示さず、実践面でもごくわずかしが努力しようとしていない。

大平のような人物なら、日本を世界の尊敬される国とし、世界の平和と繁栄のために、日本にその力にふさわしい貢献を行わしめることができただろう。彼が手を尽くしてつくり上げたであろう日本は、今日の金ぶとりになった巨人よりも、ずっと尊敬される安全な国になったにちがひない。彼を喪失した痛手は大きく、現在の危機的な世界情勢のもとでは、その痛手はいっそう強く感じられるのである。